

3. 手続き記憶検査と作業療法活動の関連性について

小川 亜紀子¹⁾ 本田 哲三²⁾

手続き記憶について近年注目されているが、その検査については作業療法場面では現在あまり用いられていない。その導入にあたり健常成人5名（男性2名、女性3名、年齢24～35歳）にて代表的な手続き記憶検査法の鏡映描写、TOWER OF TORONTO と一般的な作業療法活動のマクラメとの関連について各々の施行時間およびエラー数より比較検討し、学習曲線の傾向を検討した。

【方法】 各課題共に、1日5施行5日間連続施行した。鏡映描写は鏡に写し出された星形をみながら時計回りに金属ペンで一周描く。星形から逸脱すると自動的にカウントされ、そのエラー数と時間を計測した。TOWER OF TORONTO は Saint-Cyr の変法を用い、実験初日のみ3つの円盤にて施行後、4つの円盤で試行し2日目以降は4つの円盤のみで行ない、施行時間と移動回数を計測した。マクラメは縦50cmのマクラメ糸44本を用い、横一列計10個作成を一施行とした。

【結果】 5名の5日間の平均施行時間を

Spearman の順位相関で検討したところ鏡映描写と TOWER OF TORONTO、鏡映描写とマクラメ、TOWER OF TORONTO とマクラメのいずれにおいても有意な相関は得られなかった。一方、平均エラー数および移動回数では唯一鏡映描写とマクラメで相関係数が0.9でかつ有意水準5%で順位的一致が認められた。学習曲線ではいずれも負の指数関数的なグラフを描く傾向があったが、TOWER OF TORONTO については一時的に増加傾向を示すケースもあった。

【考案】 鏡映描写とマクラメのエラー数で有意水準5%にて相関係数0.9と高い相関が認められたことよりエラー数という質的観点からこれら2つは類似した課題と考えられた。

また、TOWER OF TORONTO の学習曲線で一時的な増加を認めたのは、この課題はコツを身につける前には一度迷うと回数が急激に増加する傾向があり、その点で他の2つの活動と異なると考えられた。

1) 東海大学病院リハビリテーションセンター

2) 東京都リハビリテーション病院